全学礼拝奏楽奉仕を通して

山田　麻有美

私は一九九七年に、女子聖学院短期大学に着任いたしました。十九年も前のことで、記憶が定かではありませんが、その年の秋ごろに、全学礼拝で奏楽の奉仕をさせていただいたのが、初めだったと思います。それから、十九年の間、技術は拙いものですが、一年に何回か奏楽の奉仕させていただいて参りました。

今日は、奏楽を担当したものとしての、苦労や感想や希望などをというご依頼でしたので、十九年間の全学礼拝をふりかえってみたいと思います。

全学礼拝が四四〇一教室で行われておりました頃は、讃美歌を歌う声が教室内に響いていたように思います。礼拝に出席する学生が少ない時でも、讃美の歌声が聞き取れない、というようなことは決してありませんでした。しかし最近、礼拝での讃美の歌声が小さくなってきているように感じています。とても残念なことです。

さて、私は奏楽の時、会衆の声を聴きながら弾くように心がけて参りました。讃美歌の多くは、素晴らしい歌詞で、音楽的に素敵なメロディーです。しかし、初めて聞く人にとっては、やはり歌いにくいものだと思います。ただ、讃美歌は、異なる歌詞を同じメロディーで何回か歌うようになっていますので、何回目かには、歌えるように

なると思います。それにしても、聞きなれないメロディーに歌詞をつけて歌うことは、なかなか難しいと思いますので、ブレス（息継ぎ）のしるしがあるところでは、ほんの少しですが間をおき、次に歌い始める音をほんの少し長めに弾くようにしています。もちろん、曲全体のテンポやリズムが崩れない程度にやりくりして、だんだん遅くなっていかないようには致します。

このようにするには、会衆の歌声をよく聴く必要があります。奏楽を担当します時は、歌っている学生や先生方の声と呼吸を聞きながら、なるべく皆さまの邪魔をしないように、また、テンポが遅くならないように気をつけて参りました。四四〇一教室で礼拝が行われていた頃は、メロディーや歌詞を間違える人も随分いたように記憶しています。それでも多くの教職員と学生の皆さまが、心を込めて歌っていましたので、私は、テンポが遅くなっていかないように、どこかでつじつまが合うようにやりくりするのが一苦労でした。

それが、いつ頃からでしょうか、讃美歌の歌声が小さくなってきました。特に、数年前から、会衆の皆さまの歌声が、小さくぼそぼそしたものになってきたように感じております。そして、自分が弾いている奏楽の音ばかりが聞こえるようになってきました（もちろん、私の耳が悪くなってきたからかもしれませんが）。奏楽は会衆の皆さまが、神さまへの讃美なさるのをお手伝いする脇役です。皆さまの讃美の歌声がチャペルを満たすように響くことが大切なのですから、楽器の音ばかりが響くようではいけません。

どうしたらよいか考えてみました。讃美の歌声が小さくなるのは、礼拝で歌われる讃美歌を知らない学生や教員が多くなってきたからなのではないだろう、と私は考えつきました。そこで、奏楽をオルガンではなく、ピアノにかえてみることにしました。ピアノでは、弾き方を工夫することで、メロディーを他の音より大きめに弾くことができるのです。メロディーがはっきり聞こえれば、その讃美歌を知らない方でも、歌うことができるだろう、と思

いました。そして、讃美歌の前奏では、会衆の皆さまがそのメロディーを聞き取れるように、ソプラノのパートの音をはっきりと弾くように努めました。

このような工夫は、功を奏しませんでした。全学礼拝での讃美の声は、少しも大きくはならなかったのです。思いばかりで私の技術が伴っていなかったのかもしれません。しかし、十年前までは、こんな工夫をしなくても、歌声は会堂に響いたと思います。馴染みのない讃美歌の時は、全体的に二節以降の声が小さくなったり、間違えたりする人がいましたが、必ず、大きな声で力強く讃美なさる方が何人もいらっしゃったように記憶しています。

なぜ、讃美の声が小さくなったのだろう、と考えてみました。二十年近く前の学生と今の学生とは質が違うからなのでしょうか。以前の学生は歌うことが好きだったけど、今の学生は歌うことがあまり好きではなくなったのでしょうか。あるいは、歌うことが苦手な学生が増えたということなのでしょうか。

今時は、カラオケに行ったことのない学生がほとんどいないくらいでしょう。数年前に学生の有志が作ったアカペラ部には、毎年、歌いたい学生がどんどん集まってきています。本当は、歌うことの好きで、歌のうまい学生が少なくない、いや増えているといってもいいのではないかと思います。それでは、学生は、讃美歌だけは歌わないのでしょうか。

こんなことを考えているうちに、一つのことに気がつきました。全学礼拝に出席している先生方もまた、小さな声でしか歌っていらっしゃらなかったのです。確かに、クリスチャンではない先生方が増えていて、讃美歌を知らないし、歌ったこともない先生が多いのかもしれません。だから、全学礼拝に出席しても、讃美歌を歌うことはなさらないという先生がいらっしゃるのかもしれません。讃美歌は、先生だって歌っていないのだから、自分が歌わなくってもいいのだ、と学生が思っているのかもしれません。

聖学院大学は、キリスト教を教育の柱としている大学です。聖学院大学の教員は、その教育の技を、神さまから負託されているのだと思います。聖学院大学の教育を担っている教員なのですから、全学礼拝で学生と一緒に、いえ、学生をリードするように讃美歌を歌ってもよいはずではないでしょうか。

ところが、当の先生方も、実は、讃美歌を歌う機会がほとんどない状況にあるのではないでしょうか。私が就任した頃に行われていた新年研修会は、教職員が大学の柱であるキリスト教を学ぶ機会だったと記憶しています。また、春と秋のキリスト教週間や創立記念礼拝などの行事も、学生とともに教員が聖学院大学の柱であるキリスト教を学び、讃美歌を歌う機会になっていたと思います。そのような機会を通して、クリスチャンではない教員も、讃美歌に触れ、讃美歌を歌うことに慣れていったのではないでしょうか。だから、全学礼拝でも、学生とともに讃美歌を歌うことができたのだろうと思います。

しかし残念なことに、近年、教員がキリスト教を学び、教職員がみんなで讃美歌を歌う機会も少なくなりました。それで、讃美歌を歌うということに慣れていないノンクリスチャンの先生方が増えたのではないでしょうか。聖書を読み、讃美歌を歌うのは、クリスチャンの先生だけで、クリスチャンではない自分は、讃美歌を歌う必要はない、と考えている先生もいらっしゃるかもしれません。

私は、聖学院大学は、キリスト教を教育の柱として、神さまによって建てられている大学だと信じてきました。その教育の土台が全学礼拝だと考えています。そして、全学礼拝での奏楽は、学生と教職員の皆さまの神さまへの讃美をお手伝いするものだと考えています。これからも、学生と教職員の皆さまの、神さまへの讃美が、聖学院大学のチャペルに響き渡るようになりますことを、願っています。

（二〇一六年二月二十四日、二〇一五年度「全学礼拝懇談会」発題
テーマ「より豊かな礼拝を目指して―礼拝音楽をめぐって」）